

大内秀明『資本論』を語る

(2) 価値形態論と「交換過程」論

2017 年 08 月 11 日執筆

マルクスは、価値形態論を説明した後、その最後の第 4 節「商品の物神的性格とその秘密」の中で、こんな注記をしています。「古典派経済学に、商品の、とくに商品価値の分析から、まさに価値を交換価値たらしめる形態を見つけ出すことが達成されなかったということは、この学派の根本的欠陥の一つである。A・スミスやリカードのような、この学派の最良の代表者においてさえ、価値形態は、何か全くどうでもいいものとして、あるいは商品自身の性質に縁遠いものとして取り扱われている。その理由は、価値の大きさの分析が、その注意を吸いつくしているということにあるだけではない。それはもっと深いところにある。労働生産物の価値形態は、ブルジョア的生産様式の最も抽象的な、だがまたもっとも一般的な形態であって、その生産様式は、これによって社会的生産の特別な種として特徴づけられ、したがって同時に歴史的に特徴づけられているのである。したがって、もし人あって、これを社会的生産の永久的な自然形態と見誤るならば、必然的に価値形態の、したがってまた商品形態の、さらに発展して、貨幣形態、資本形態等の特殊性をも看過する。」

少し長い引用ですが、スミスが本源的購買貨幣とした労働で、自然から労働生産物を購買して、生産過程を流通過程とした素朴な流通主義の誤り、それが価値形態、貨幣形態、さらに資本形態、そして労働力の商品化をも看過した根本的誤謬と見ている。そして「商品の神秘的性質はその使用価値から出てくるものではない。同じように価値規定に内容から出てくるものでもない」「価値形態それ自身からである」と述べている。そうだとすれば、マルクスの方も、商品形態をたんなる労働生産物に還元しないで、労働力や土地・自然を含む商品形態、そして形態規定から価値形態を展開しなければならなかったのではないか？その点が不明確なために、マルクスの価値形態論もまた、理論的に多くの不十分な点を残しています。とくに労働生産物が商品交換で等置されれば、等量の労働により相互の等価交換が行われることになる。そのため価値形態論で提起される相対的価値形態と等価形態の役割の違い、つまり相対的価値形態の商品の側の「一方的価値表現」といった形態的特徴が不明確になってしまう。古典派経済学と同様、商品交換は商品のたんなる相互交換であり、したがってまた貨幣も、商品交換の便宜的媒介物に過ぎなくなってしまうのです。

マルクスは一方で「蒸留法」で労働価値説を論証し、古典派経済学の価値実体を継承しま

すが、同時に他方で商品価値を価値関係として、価値形態を明らかにしました。すでに価値形態として貨幣形態を導き、貨幣の必然性を論証しています。にもかかわらず第2章として「交換過程」を説明し、第1章を補足するのです。そのため第1章と第2章の関係、第2章で何を補足しようとしているのか？色々議論が出ることになる。その論争には立ち入りませんが、マルクスが第2章「交換過程」を論じた理由を、ここでは改めて探ってみることにしましょう。

「商品は、自分自身で市場に行くことができず、また自分自身で交換されることもできない。」とマルクスは述べ、まず「商品所有者」を登場させます。しかし、価値形態を論ずるときも、商品所有者はいたはずであり、商品所有者の商品関係、価値関係、それが価値形態だったはずです。それなのに、ここで交換過程を論ずる段になって、わざわざ商品所有者を登場させるのは何故か？商品所有者の法的関係、「私有財産所有者」としての認知が必要としているのでしょうか。その認知の上で、交換に当たり「商品はそれが使用価値として実現される前に、価値として実現されねばならない」、と同時に「他方において、商品は、それが価値として実現される前に、使用価値であることを立証しなければならない」と述べ、古典派経済学と同様に商品交換の矛盾を提起します。

しかし、この交換の矛盾は、すでに価値形態論で明らかにされている筈です。しかしマルクスは、ここでさらに「直接的な生産物交換」＝物々交換を持ち出し、その拡大の中で「交換の絶えざる反復は、それを一つの規則的な社会的過程とする。」そして、一般的等価となる「第三の商品」が便宜的媒介物として登場し、貨幣商品となる。こうした商品経済の歴史的説明に関連してですが、「商品交換は、共同体の終わるところに、すなわち、共同体が他の共同体または他の共同体の成員と接触する点に始まる」とか、「金と銀はほんらい貨幣ではないが、貨幣はほんらい金と銀である」といった、まことに興味深い示唆に富んだ名言も出てきます。

このように物々交換から商品の交換過程の歴史的な拡大と発展を通して、マルクスは貨幣商品の歴史的形成を説明し、価値形態論の論理を歴史により裏付けようとしているのでしょう。しかし、この歴史的・論理的説明も、出発点が労働生産物の「商品所有者」であり、商品所有の歴史的根拠を求めることになってしまう。労働価値説が前提になっている以上、貨幣物神の説明も次のようになります。「土地の内奥から取り出されてきたままの金と銀とは、同時にすべての人間労働の直接的な化身である。このようにして貨幣の魔術が生まれる。人間がその社会的生産過程で、たんに原子的な行動を採っているにすぎぬということ、したがって、彼らの規制と彼らの意識した個人的行為とから独立した彼ら自身の生産諸関係の物財的な姿は、まず、彼らの労働生産物が一般的に商品形態をとるということの中に現れる。したがって、貨幣物神の謎は、商品物神の目に見えるようになった、幻惑的な謎に過ぎない。」

ここでは、貨幣商品もまた金や銀の労働生産物に還元され、貨幣物神も「労働生産物が一

般的に商品形態をとるということの中に現れる」として、価値形態論を通して解明された「貨幣物神」は、たんなる「商品物神」論に解消されてしまうのでしょうか。古典派経済学は、スミスのように生産過程を流通過程化して、労働を「本源的購買貨幣」として流通主義に陥った。マルクスは、価値形態論を展開し、上記のように貨幣形態、資本形態、そして労働力の商品化を説明しようとしているはずですが、マルクスの第2章「交換過程」論は、価値形態の論理を商品所有者による商品所有の法的根拠を問いながら、交換過程と貨幣の歴史的発生に踏み込んでいる。価値形態論の論理と歴史の統一を図ろうとしたのですが、それは古典派の流通主義への逆転だったように思います。

さらに言えば、マルクスがここで商品所有者による商品所有の根拠を問いながら、商品を労働生産物に還元している。ここでの商品所有者は、労働生産物の所有である以上、商品所有者はいわゆる「単純商品生産者」であり、単純商品生産者の社会の「交換過程」であり、『資本論』が抽象した純粹資本主義の世界ではない。しかし、周知のように歴史的に単純商品生産社会は存在しなかったし、その交換過程も存在しなかった。スミスは「初期未開の社会」から出発し、事実上、単純商品生産社会で労働価値説を展開した。マルクスもここで労働価値説を継承し、単純商品生産社会で「自己の労働にもとづく個人的所有」の「所有法則の転変」を論ずることになりますが、そうした「単純商品生産史観」については、いわゆる「所有法則の転変」の問題として後述しましょう。

「論点」労働価値説と私的所有

ここ「交換過程」論で、マルクスが商品の「所有者」を持ち出す有力な理由は、労働価値説と商品所有者の私的所有権の法的な認知が必要だったからだと思われれます。マルクスは労働価値説をA・スミスなど古典派経済学から継承しましたが、労働価値説そのものは、さらに古くW・ペティの『租税降納論』(1662)などにも見られます。さらに自然法との関連で労働価値説により私的所有権を根拠づけたのは、J・ロック(1632~1704)の労働価値説だと言われます。ロックは「イギリス経験論の父」と呼ばれた哲学者、非常に多才であり政治学、法律学、経済学などの著作があります。労働価値説の源泉と言われる彼の労働価値の考え方ですが、労働する当人の果実として、自然界の共有物から切り離され、当人の私的所有が認知される。必要の限度を超えた財産の私有も、貯蔵が可能な貨幣の価値を承認する社会契約により根拠づけられる。

こうした個人的労働による私的所有権の認知こそ、すでに述べたとおりA・スミスの場合、本源的購買貨幣としての労働による自然からの購入として根拠づけられる。スミスの『国富論』では、商品交換を分業により説明しますが、分業労働により私的所有も認知された。初期マルクスも、エンゲルスとともに「経・哲草稿」「ドイツ・イデオロギー」で、スミスなど古典派経済学の批判的継承を進めました。とくにヘーゲル左派の立場から、すでに疎外論が前提されていますが、例えばスミスなど「国民経済学」の場合、「私的所有は、人間が[主体であると]同時に自己に対して対象的となり、同時にむしろ疎遠な非人間的な対象として

の自己になるということ、人間の生命の発現がその生命の外化であり、人間の現実化がその現実性剥奪、すなわち一つの疎遠な現実性であることの感性的表現に過ぎないが、――」（『経済学・哲学草稿』岩波文庫訳 136 頁）と述べられている。

ここでは、疎外の意味が必ずしも明確ではないが、人間が労働という主体的活動を通して「对象的」となること、しかも対象化された労働に他ならない生産物が疎遠な形で処理される事実こそ、疎外が主張されています。「疎外された労働」の概念整理に従えば①労働が生産物として対象化されている事実、しかも②分業労働により交換を通じて、生産者から生産物が手放されている事実、それらを指しているように思われます。こうした個人的労働と個人的所有の関係から、さらに分業労働と個人的所有を単純商品生産社会の生産関係とする。その発展の上で資本主義生産では工場制度など、生産の社会化が進む。生産の社会化に対して、所有の個人的性格の矛盾が深まり、「否定の否定」から社会的生産に対する社会的所有が提起される『資本論』の「所有法則の転変」のトリアーデが導かれることになる。その検討は『資本論』第 1 巻、第 6 篇の資本蓄積論で立ち入って検討しましょう。

いずれにしても、ここ「交換過程論」における商品所有者の登場、そして個人的労働による個人的所有の認知は、労働価値説に基づくマルクスの歴史認識として極めて重要です。初期マルクスとエンゲルスの労働疎外論が、マルクスの唯物史観として『資本論』の世界に大きく影響していますが、こうした労働価値説の受容が、古典派労働価値説の批判的継承としての「価値形態論」、さらに「労働力商品化論」など、流通形態としての商品、貨幣、資本の理論的展開といかなる関係を持つか？『資本論』最大の論点として、ここで提起されていると思われます。なお、私的所有と商品経済については、『国富論』だけでなくスミス『グラスゴー大学講義』、初期マルクス・エンゲルスについても、「草稿」とともに「ドイツ・イデオロギー」などの検討も必要です。それについては、旧稿に属するが拙稿「私的所有と商品経済—スミスとマルクス—」（東北大学教養部紀要第 2 号所収）を参照のこと。